

## 巻頭言

昭和30年代、科学技術への期待が膨らみ、バラ色の未来が開けるだろうと多くの人が考えていた。自分が大人になったときには社会はある意味で完成した姿を現すだろうと、幼かった私も考えていた。手塚治虫の「鉄腕アトム」に代表された、科学技術は人を幸せにするものだという信念は、公害の時代を経て、次第に人々の心から消えて行き、私が大人になった現在でも社会はなんらその望ましい結末を迎えてはいない。

人類が宇宙へ乗り出すという夢があった。2001年には木星へ原子力宇宙船が飛ぶ予定でもあった。「宇宙」という一言に惹かれて、私は大学院で宇宙科学研究所の門を叩き、其処へいたる道は遠く険しいものであると痛感することになる。学生の身で4つのロケット実験、2つの気球実験に参加し、成功は1つだけという、今であれば大変な批判を浴びる経験をしながらも、しかし、まだその頃はそのような自覚は無かった。全ては情熱があれば許された。

日本で惑星探査が走り始め、それが今までのミッションとは異質なものであることが認識され始めた頃、私は宇宙科学研究所に戻ってきた。ミッション立案から成果が得られるまで10年、しかも成功率は経験豊富な米国でさえ1/3。一つのミッションに200億円以上の経費がかかり、同じビッグサイエンスの雄であるアルマ計画の日本分担金275億円と較べて、その非効率を取りざたされる。宇宙科学における閉塞感が漂う現在の状況に戸惑う自分を見出す今、私は10年前のある学生との問答を思い出す。

大学に赴任して最初の大学院面接試験の席で実験志望の4年生に私は問うた。実験を志しても、成果が出るまで10年、報われもせず、下手をすると君の人生を棒に振るかもしれません。それでもやりますか？周囲のあきれた顔をものともせず青年は承知と答えた。

惑星探査を志す全ての研究者に、今、同じ問が投げかけられている。それでもあなたは惑星探査をやるのか？

私はこう答えるしかない。死んで行った人々のために、未来に生きる若者のために、永遠の恋人のために、今を生きる私のために、それは成されなければならないと。

中村 正人